

# ヘルダーの『言語起源論』の受容

—ヤーコプ・グリムによる講演『言語の起源について』を中心として—

鶴田涼子

## 1. 初めに

1816年から1818年にかけて、グリム兄弟Die Brüder Grimmによって編まれた『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen*が出版された。彼らの伝説蒐集の着手には、伝説を伝える言語というものに対する捉え方、とりわけ文献学者であり言語学者でもあったヤーコプ・グリムJacob Grimm<sup>(1)</sup> (1785-1863)の言語観や物語観が多分に関与している。グリムは、言語というものを、また、伝説というものをどのように捉えていたのだろうか。本論考では、18世紀の言語哲学と有機的に絡み合うグリムの言語観に鑑み、伝説というものが、彼の言語観とどのような繋がりを持つものであるか考察する。

## 2. 言語の始まり

グリムは、1851年に『言語の起源について』*Über den Ursprung der Sprache*と題する講演を行い、そこで彼は、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーJohann Gottfried Herder (1744-1803)の『言語起源論』*Abhandlung über den Ursprung der Sprache* (1772)<sup>(2)</sup>を称賛している。<sup>(3)</sup>グリムが後に受け継ぎ、発展させることになるヘルダーの『言語起源論』が書かれるに至るには次のような流れがある。

18世紀のドイツは、国として成り立っておらず、300余りの国に分かれていた。<sup>(4)</sup>当時、ベルリン・アカデミーでは、言語の起源に関する議論が巻き起こっていた。アカデミーの会員、ヨーハン・ペーター・ジュースマルヒJohann Peter Süßmilch (1707-1767)は、1756年の講演で、言語神授説を取り、言語は

人間によって作り出されたものであるとする説を真っ向から否定した。<sup>(5)</sup>その内容が公にされると、当時の学界にかなり強烈な論争が巻き起こった。<sup>(6)</sup>そのため、ベルリン・アカデミーは1769年、ついに次のような課題を掲げて懸賞論文を募る。<sup>(7)</sup>「人間はその自然的能力に委ねられてみずから言語を発明することができるか。そして、いかなる手段によって人間はこの発明に到達するであろうか。この問題を明快に説明し、すべての難点を満足させる仮説を求む。」<sup>(8)</sup>この懸賞課題に対して提出された30篇の論文の中から、最優秀賞に選ばれたのが、ヘルダーの『言語起源論』である。ヘルダーは、言語の神授説に異を唱え、人間が言語を生み出したのだと主張する。

### 3. ヘルダーの言語論

ヘルダーの『言語起源論』は、「人間は動物として言語 [Sprache] をもっている。」(H. : S. 697) という一文から出発する。ヘルダーは、ここで、人間はそもそも動物として、他の動物が発する声と同等の声を持っていることを指摘している。まず、動物としての人間を取り上げた後、動物のうちで唯一人間のみが言語を使用することがなぜ可能であるのかを論証することによって、言語が人間によって創造されたとする論を強固なものにしていく。ヘルダーは述べる。

なんとも孤立し、全世界の敵対するどんな嵐にさらされているように見えても、それ [人間] は孤独ではない。それは、自然全体と結びついているのである。繊細な弦ではあるが、自然は、これらの弦の中に音を隠し置いた。これらの音は、[...] 目に見えない鎖を通るように、遠く離れた心に、この見たことのない被造物のために感じる火の粉を伝えることが出来る。このため息 [Seufzer]、この音が言語である。(H. : S. 698)

ヘルダーは、声にならない息というものを言語のもとと捉え、そこに人間の言語の萌芽を見出す。ここでの言語とは、人間のみが使用することの出来るものであり、人間を人間たらしめるものである。ヘルダーは、人間という存在を、次のよ

うに表現する。

ここにもものを感じる存在がいる。彼の生き生きとした感情のどれ一つとして彼自身の中に閉じ込めておくことが出来ない存在がいる。それは、不意の一瞬に、意欲的にこうしようという意図なく、どの感情をも音に出さざるをえない存在なのである。(H. : S. 698)

ヘルダーはここで、己が感じたものを、己の内部に留めておくのではなく、音として発するという人間の自然の法則を提唱している。そして、ヘルダーは、動物が発する音と人間の言語を次のように区別する。

[...] どんな動物であっても、たとえ最も完全な動物でさえも、人間の言語の本来の始まりを少しも持っていない。叫び声を好きなように形成し、洗練し、組織化するがよい。しかし、この音声を意図的に用いる悟性がそれに付け加えられなければ、先の自然法則にしたがって人間の意欲的な言語がどのようになるか私にはわからない。子どもは動物のように感覚の音を発する。しかし、彼らが人間から学ぶ言語はまったく異なる言語ではないだろうか。(H. : S. 708)

つまり、ヘルダーは、人間の言語は、他の動物が発する声とは一線を画すると指摘している。それでは、なぜ、動物が発する感覚の音と、人間が学ぶ言語という、まったく異なるものをそれぞれが持つようになったのだろうか。ヘルダーによると、動物は、局部的に限定された能力や本能を持つために、狭い生活空間を持つ。ところが、人間は、そのような突出した能力や本能を生来のものとはしない。人間は、限られた使命を持たないからこそ、あらゆる可能性を持ち、能力を伸ばしていくことが出来るのである。ヘルダーは述べる。

動物の感覚機能、身体能力、芸術衝動は彼らの活動範囲の大きさと多様性に反比例して強度と集中力を増す。ところで、人間は、ただ一つの仕事しか彼

を待っていないような単調で狭い領域を持っていない。[...] 人間の魂の力は世界中に広がっている。彼の表象は決して一つのものに向けられておらず、したがって、芸術衝動も完成された技能もない。(H. : S. 713)

生まれるときに本能の強さと確実さを与えられなかった人間だからこそ言語を創造しうるのであり、人間のさまざまなものを表象する力が言葉を生み出すのである。<sup>(9)</sup>このように展開されていくヘルダーの論には、明らかにルソーに対する批判が込められている。ジャン・ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) は、『人間不平等起源論』 *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes* (1755) の中で「人間の最初の言葉、[...] は、自然の叫び声である。」<sup>(10)</sup>と述べ、動物の叫び声と人間の言語を一直線上に置いている。ルソーが、自然の叫び声から人間の言語ができると考えたことに、ヘルダーは疑問を呈している。<sup>(11)</sup>ヘルダーにとって、「言語の発明は、人間が人間であることと同じように自然」(H. : S. 722)なのである。

最初の、最も低い理性の使用でさえ、言語なしには起こりえなかった。[...] もし言語がなければ、人間にとって理性はありえなかった。そういうわけで、言語の発明は、人間にとって理性の使用と同じほど自然で、古く、根源的で、特質を示すものであった。(H. : S. 726)

このようなヘルダーの見解は、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716) に続く言語観と見て取ることが出来る。ライプニッツは、「言語は思想の記号であるだけでなく、事物の記号であり、われわれが記号を必要とするのは、われわれの意見を他の人に伝達するためだけではなく、われわれの思想そのものを助けるためである」<sup>(12)</sup>と述べている。したがって、人間が考えるためには、言語が必要なのであり、考えることと言語とは、相互に絡み合っている。ライプニッツは、ある概念を定義するためには、概念に含まれるメルクマールを見つけ出さねばならないとしたが、このメルクマールという概念は、ヘルダーの論においても欠かすことの出来ない要素である。

人間の言語は、周囲に鳴り響く音を、人間が持つ意識する能力によって認知されることで初めて生み出されていく。例えば、自然が発する音が、人間の言語のもとになる。森のざわめきは、木の葉が重なり合い、風と呼応することによって生み出されるものである。こうした自然の音は森の言語として捉えることが出来、母なる大地の子守り歌となる。さまざまなメルクマールが、それを感知する人間によって言葉として表現されるようになる。

#### 4. ヘルダーからフンボルトへ

ライプニッツからヘルダーを経た後、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1767-1835) による考察においても、人間と言語の関わりが強調される。フンボルトは、「言語は人間そのものに属し、人間の本質以外に何の源も持たないし、知らない」<sup>(13)</sup>と述べ、言語を人間と一体のものとしている点において、ヘルダーの理念を受け継いでいる。<sup>(14)</sup>フンボルトは、子どもが言語を使い始める時、最初は母親から母親の用いる言語を習得するが、次第に子どもは言語を自分のものにし、自ら言語を作っていくと考え、ここに言語の普遍性と個別性、そして多様性があるとする。<sup>(15)</sup>フンボルトによれば、言語の使用は、世界の見方という意味での世界観と繋がるものである。

言語が世界観であるのは、単に全ての概念は必ず言語によって捉えられることになっているがゆえに、言語は世界の外延と一致しなくてはならない、という理由からではなく、言語が対象に及ぼす変化によって初めて、世界の概念と不即不離の関係を持つことを、精神が洞察出来るようにするためである。<sup>(16)</sup>

フンボルトにとって、世界の見方と分かちがたく結びついている言語は、世界を思想に変える行為である。<sup>(17)</sup>この行為は、個別的であるのだが、それは個々人にも、言語の共同体にも当てはめることが出来る。彼は、言語を、本質的に社会性を持つものとした上で、「人間は、単なる思考のためにも私 [Ich] に対するあな

た [Du] を必要とする。」<sup>(18)</sup>と述べる。この一文が示すように、フンボルトの見解の独創性は、「聞く」という行為を、言語の本質的な構成要素としている点にある。フンボルトの論において、言語活動は、「聞く」ことを内包しているのであり、言語の意味は、語ることと聞くことが相互にもたらす作用によって生み出されていく。<sup>(19)</sup>たとえ、声に出さずとも、考える行為には言葉が必要であり、そこには、考える者自身の中に自身と相手がいなければならないのである。フンボルトが考察の対象としたのは、使用され、その都度変化していく言語であった。人間は、既に使用されている言語を使うが、発せられる言語は出来合いのものではなく、発する者により新たに生み出されるものである。

## 5. グリムの言語観

18世紀のドイツで巻き起こっていた言語の起源に関する論争は、ヘルダーの『言語起源論』によって、一時的に終止符が打たれたのであるが、彼の論考は、ヘルダーの師友、神的起源説を主張するヨーハン・ゲオルク・ハーマン Johann Georg Hamann (1730-1788) からの批判を受ける。『言語起源論』の刊行から約80年が経過した1850年には、フリードリヒ・ヴィルヘルム・シェリング Friedrich Wilhelm Schelling (1775-1854) により、言語の起源の問題が再び取り上げられる。<sup>(20)</sup>その翌年、グリムは、『言語の起源について』の講演を行い、その中で、ヘルダーが『言語起源論』において述べた答えは、今なお変わることなく適切であることを指摘する。しかし、グリムは、その論を言語の起源に対する完全なる答えと見ていたわけではない。彼は、ヘルダーの『言語起源論』の不足箇所を補う形で、ヘルダーとは異なる方向から論を進める。『言語の起源について』の講演の中で、グリムは、人間の創造と同時に、言語が生得的に人間に備わっている可能性と、人間が創造された後に神から言語が啓示された可能性を考察し、そのどちらをも否定した上で、人間が言語を作り出したとする説を主張する。

生来の言語を仮定すれば人間を動物と同じものにすることになり、啓示された言語を仮定すれば、人間の中に神々を前提とすることになっただろう。[…]

言語は、その起源と進歩の点からみて、完全に自由に私たち自身によって獲得された人間的なものでなければならない […]。それは私たちの歴史であり、遺産なのである。(G. : S. 275)

こうしたグリムの言語観に対して、ルートヴィヒ・デーネッケは、「グリムの言語の構造に対するより集中的な取り組みは、最初からそしてその後も変わることなく、語を通して『事態』[Sachen]を解明することを狙っていた。彼は、言語形態とその連関の歴史的生成の認識を追及し」<sup>(21)</sup>ていたと述べている。先のように、人間の言葉の獲得について述べた後、グリムは語根の例を取りあげる。そこで彼は、「人間」Menschの語源が、神話上の祖先Mannaなどに遡ることを指摘する。その語根は、manすなわち「考える」であり、サンスクリット語で「精神」や「意識」を意味するmanasであり、「人間」menschも直接そこから派生しているとする。<sup>(22)</sup>そして、さらに次のように言及している。

人間 [mensch] は、考えるがゆえに人間と呼ばれるだけでなく、考え、考えるがゆえに言葉を話すために、人間なのである。人間の考える能力としゃべる能力のこのきわめて密接な関係が、人間の言語の基礎と起源を私たちに示し、保証している。(G. : S. 276)

グリムは、言語が人間によって創造されたとするヘルダーの『言語起源論』に、人間を表す印欧語の語形そのものと語の意味から、ひとつの証拠を提示した。デーネッケは、グリムの講演内容における特徴は、既にヘルダーが『言語起源論』において要求した言語の神授説からの脱却とする。<sup>(23)</sup>しかしながら、グリムは、ヘルダーも同様であるが、言語と神との関係を完全に否定的に見ているのではない。ヘルダーは、自然や人間の身体が神によって創造されたものである以上、人間が言語を作り出したにせよ、人間の感覚が、例えば、自然を感知してメルクマールを認識し、言語を生み出すのであるから、言語と神の関係は直接的ではないものの、これらの関係を完全に断ち切ることは出来ないとする。これと同じように、グリムもまた次のように述べている。

創造主は魂を、すなわち考える力を、また言語の道具 [sprachwerkzeuge] を、すなわち話す力を、私たちの中にもともに貴重な才能として与えてくれた。しかし私たちは、思考能力を鍛えることによって初めて考えるのであり、言語を学ぶことによって初めて言葉を話すのである。[...] この考えがなければ、私たちは動物と同様に剥き出しの必然性の手に引き渡されていただろう。私たちはこの自由によって向上してきたのである。(G. : S. 277)

ヘルダーが用いた概念、可能態、能力態、現実態<sup>(24)</sup>という区分にグリムが立脚している点に両者の関連を捉えることが出来よう。グリムの見解においても、思考能力や言語能力は伸ばすことの出来るものなのである。グリムは、講演において、動物が話さないのは、考えることがないからであり、それゆえに彼らは「語らざるもの」、「理性を持たないもの」(G. : S. 276)を意味する語で呼ばれることを指摘している。語らざるものは、理性の可能態を持たないのである。これに対して、人間の「子どもは考えはじめるようになると、しゃべり始める。言葉は思考が育つにつれて育ち、両者とも加算的にではなく乗算的に成長していく」(G. : S. 276)。

グリムは、言語を、私たち自身によって完全に自由に獲得された人間的なものとし、それはまた、フンボルトの言うように、多様性を持つものと捉えている。ヘルダーが述べた、人間の表象能力Vorstellungskräftenと言葉の関係は、自らが生きる生活空間の複層性と言葉の関係に繋がるものである。子どもが、初めに耳にし、寄り添って語りかける母の言葉が、世界の見方の基盤となっていくがゆえに、グリムが述べたように、「どの個々の言語の特性も、その言語を使うものが生まれ育つ時と場所に依存している」(G. : S. 265)のである。そうであるからこそ、言語によって伝えられるものが、その言語を話す者の歴史を教えてくれることになるのである。

## 6. 民間伝承という道連れ

言語を媒介として伝えられる民間伝承について、グリム兄弟は、『ドイツ伝説



集上巻』(1816)の序文で、次のように述べている。

〔人生に旅立つ人間の〕この慈悲深い道連れとは、童話、伝説、歴史という無尽蔵の宝のことである。三者は互いに並び合って次々と遠い昔を爽やかな瑞々しい精神として我々に近づけようと努める。三者はそれぞれの領域を持つ。童話は詩的要素が勝り、伝説は歴史的要素が勝る。<sup>(25)</sup>

ここで、童話<sup>(26)</sup>、伝説、歴史は、それぞれの枠を持ちながら、個々人の故郷から同伴する宝として共通に捉えられている。しかし、伝説は、童話と異なり、どこでも聞かれるというものではない。伝説が残されるには、ある前提が必要なのである。これについて、グリム兄弟は上掲の序文で以下のように考えている。

民衆からすれば、伝説の真実性はその伝説の基盤となっている証拠物によって十分に証明されている。証拠物が目に見えて、近くにあって否定しがたいという事実を前にすると、それに結びつけて語られる奇跡に対する疑いが消えるのである。この了解こそ、伝説の紛れもない徴である。<sup>(27)</sup>

伝説は、ある場所や歴史上の實在の人物と結びついているからこそ伝説となりうるものであり、伝説が信じがたいものであるにも拘わらず、時を隔てて残されるには、このような了解が必要となる。こうした結びつきを通して、人は、ある瞬間に、それらの対象の語る不思議さを聞き取る権限を手に入れることが出来る。そして、「今なお、伝説は、もはや歴史の手の届かない遠いはるか昔の土地や場所にむかうのである […]」<sup>(28)</sup> 伝説には、忘れ去られた過去の、まだ明るみに出ていない事実が隠されているように思われる。人間しか持つことの出来ない言葉は、時間や空間を体現し、時間や空間に縛られている。だが、伝説は、言葉によって土地や時代を超越して伝承される。「伝説 […] には、いくつかの忘れ去られた場所の記憶が保管されている」<sup>(29)</sup> のであり、身近にその真実性を連想させる何ものかがあることによって、伝説は人々に信じられ続ける。

## 7. グリムの言語観と民間伝承

前述したグリムの講演内容は、言葉と言葉に類縁性のある他のものにまで考察が及んでいる。グリムにとって、言語は、音楽に先んじてあるものであった。彼は語wortを、調子をとって朗読することによって歌謡gesangや歌曲liedが生まれるとする。さらに、歌謡から他の文学dichtkunstが生まれ、歌曲から音楽musikが生まれるとする。講演で、グリムは、「言語[sprache]は、音楽[musik]の沈殿物というよりは、音楽の方がはるかに言語の昇華物である」(G. : S. 296)と述べている。つまり、グリムによれば、時間や空間を越えることの出来る言語から、音楽Musikが生まれるのである。このように考える理由を、グリムは「音楽は、言葉を放棄することによってあれほどの高みに飛翔し、どのような思考も確実にについてはいけなくなったという事情があるからである」(G. : S. 296)と述べる。音楽もまた、ある瞬間に出生を持ちながらも、時代や国境を越えることが出来るという性質を持っている。音楽は、一回性を持ち、消えていくが、それを耳にした者には、記憶として残る。再び、類似の音や歌に出会ったとき、その音楽や歌を思い出し、そこから連想される過去のことを思い出すことが出来る。五感を通して、人は記憶を、強い感覚の連鎖によってよみがえらせる。

例えば、言葉を伴わない母の発する音を、言語の昇華物と解される音楽のように、子どもはこの世に生まれ出る前から感じ取っている。それはつまり、母の持つ音、生きていく証としての鼓動や血液の流れる音であり、それらは、母が持つリズムとして子どもへと伝わる。この世に生まれ出た子どもは、母の発する音を、大気の振動を介して耳にするようになる。母なる大地の音を、自らの感覚を通して聞き取るようにもなる。子どもをあやす母が歌う子守歌は、子どもの泣く声と交じり合うことによって、また一つの音楽となる。そして、この世に生まれた子どもは、母の語りかけによって、母語を学び始める。自分がここに生きているという意識は、こうした、親と子、人と人の繋がりによって作られていくのであり、母語を学びながら、子どもは童話を楽しむことを知る。母語を持ち、母語を話す人々は、生まれ育った土地や時間と強く結びついているのである。個々の言語と人々の生活空間は、このようにして繋がってくる。グリムは、『言語の起源につ

いて』の講演で、この事情を次のように述べている。

乳児は、母親の胸で、自分に語りかける優しく柔和な母の声を通して最初の言葉を耳にする。まだ、自分の言語器官を使うことが出来ないうちに、それらの言葉は乳児の純粋な記憶にしっかりと定着する。そのために、それは母語／母の言葉 [muttersprache] と呼ばれ、年とともにすみやかに世界が広がると、十分な内容をもつようになる。それだけが、私たちを故郷や祖国と結びつける、けっして消すことの出来ない絆なのである。(G. : S. 277)

母語は、母の語りという行為によって、自然と子どもの中へと浸透していく。「われわれの想像力 [phantasie] は、ごく幼い頃から祖国の伝説や歴史によって育まれ、消し難い追憶もそうしたものと繋がっている」<sup>(30)</sup>のである。共通の母語を持つ者という繋がりが、親と子、同じ土地に住まう人と人との間で生まれうる。こうした繋がりは、人間の持つ身体性によって、時間や空間と離れることが出来ず、この瞬間、この場所に限定される。しかし、ただ一つ、人間の表象能力と連結して生み出される言葉だけは、そのどちらをも超えることが出来る。言葉は、人間が「いま・ここ」にいながらにして、「ここではない場所」の遠い過去を思い出し、未来のことを想像し、語ることを可能にするのである。時や場所に縛られて習得される言葉は、一方では、時や場所に縛られることのない、自由を獲得している。しかしながら、これによって、民間伝承は故郷から遠ざかるわけではない。童話は、その童話が生まれた時間と生まれた地に言語の根を生やし、伝説は、その伝説が生まれた時間と生まれた地に言語の根と証拠物を残す。「伝説は、太古の風変わりな語彙や言い回しをそこここに残す方言に似ている」のである。<sup>(31)</sup>そして、声によって、言葉として運ばれた先で、それらは再び変化する。ヤーコプは述べる。

さまざまな地域で、別の名前をもって、さまざまな時代に、同一の物語が聞き取られる。しかし、人は、その物語を、それぞれの場所で、それぞれの地方や土地に相応しいように、そこの習俗を採り入れた新しい話として聞く

[...] <sup>(32)</sup>

言葉とともに、民間伝承は、変化しながら伝えられるのである。つまり、民間伝承は、生まれた地や流れ着いた地との結びつきを繰り返し生み出す。グリムは、「心に直接に語りかける声の価値」<sup>(33)</sup>を重要視し、「童話を本当に的確な方言で語ることが幸運にも出来たならば、童話はもっとずっとすばらしいものになっていただろう」と述べる。<sup>(34)</sup>しかし、グリムは、こうした伝承を可能にする人と人との繋がりが失われていることを感じていた。だからこそ、グリムは、「洗練された書き言葉は、[...] 無味乾燥なものになる」<sup>(35)</sup>ことを承知の上で、人間が持ちうる能力から生じる物語を、人間の能力によって後世まで残すために、民間伝承を蒐集し、文字として書き留めたのである。蒐集された民間伝承は、書かれることによって一般化されたとしても、方言という口承の要素を隠し持つ。それゆえに、民間伝承がたとえ書かれたものであってもなお、人々はそこから故郷の空気を感じる事が出来る。書き留められた民間伝承は、再び声によって伝承されることで、生氣を取り戻す事が出来るのである。以上のようにグリムの言語観、物語観を見てきたのであるが、彼の言語観や物語観が、実際にまとめられたテキストにどのように反映されているか、今後追究していきたい。

## 使用テキスト

Herder, Johann Gottfried: *Werke in zehn Bänden*. Bd. I: *Frühe Schriften 1764-1772*, Frankfurt am Main 1985. ここからの引用は本文中の括弧内にH.と略記し、頁数を示す。なお、原典における強調部分には傍点を付す。

Grimm, Jacob: *Über den Ursprung der Sprache*. Gelesen in der Akademie der Wissenschaften. Am 9. Januar 1851. In: J. Grimm, *Kleinere Schriften*, Bd. 1, Hildesheim 1965. ここからの引用は本文中の括弧内にG.と略記し、頁数を示す。

## —注—

(1) これ以降、グリムと記す。

(2) 『言語起源論』は、1770年12月にシュトラースブルクで完成された。ヨーハン・ゴット

- フリート・ヘルダー（木村直司訳）：『言語起源論』（大修館書店）1972年、197頁参照。
- (3) Vgl. Grimm, Jacob: *Über den Ursprung der Sprache*. Gelesen in der Akademie der Wissenschaften. Am 9. Januar 1851. In: J. Grimm, *Kleinere Schriften*, Bd. 1, Hildesheim 1965, S. 298.
- (4) 木村靖二：『ドイツの歴史』（有斐閣アルマ）2002年、105頁参照。
- (5) Süßmilch, Johann Peter: *Versuch eines Beweises, daß die erste Sprache ihren Ursprung nicht vom Mensch, sondern allein vom Schöpfer erhalten habe*. Berlin 1766.
- (6) 齊藤渉：『フンボルトの言語研究』（京都大学学術出版会）2001年、94頁参照。
- (7) 麻生健：『ドイツ言語哲学の諸相』（東京大学出版）1989年、46頁参照。
- (8) Irmscher, Hans Dietrich: *Nachwort*, In: Herder, Johann Gottfried: *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, Stuttgart 1966, S. 137-175. ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（木村直司訳）：前掲書、197頁参照。
- (9) ヘルダーは、人間の力のこの仕組み全体を、知性や理性、熟慮などと呼んでもよいとしている。Man nenne diese ganze Disposition seiner Kräfte, wie man wolle, Verstand, Vernunft, Besinnung usw. Herder: a.a.O., S. 717.
- (10) Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1755. ジャン・ジャック・ルソー（本田喜代治、平岡昇訳）：『人間不平等起源論』（岩波文庫）2006年、62頁参照。
- (11) Vgl. Herder: a.a.O., S.710.
- (12) Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Hauptschriften zur Grundleitung der Philosophie*. Bd. 2, Hamburg, 1966. S. 520.
- (13) Humboldt, Wilhelm von: *Gesammelte Schriften*, Bd. 6, Berlin 1968, S. 120.
- (14) カッシーラーは、ヘルダーの内的言語という捉え方が、フンボルトに受けつがれたと指摘している。エルンスト・カッシーラー（岡三郎、岡富美子訳）：『言語と神話』（国文社）1972年、51頁参照。
- (15) 麻生健：前掲書、84頁参照。
- (16) Humboldt: a.a.O., S. 180.
- (17) Vgl. Humboldt: a.a.O., S. 180.
- (18) Humboldt: a.a.O., S. 160.
- (19) ウィルヘルム・フォン・フンボルト（村岡晋一訳）：『双数について』（新書館）2006年、181頁「訳者解説」参照。
- (20) 1850年11月25日、「言語の起源の問題についての序説」を示す。
- (21) Ludwig Denecke: *Jacob Grimm und sein Bruder Grimm*, Stuttgart 1971, S. 89.
- (22) Vgl. Grimm: a.a.O., S. 275f.

- (23) Vgl. Ludwig Denecke: a.a.O., S. 98.
- (24) ヘルダーの考察においては、人間存在や自然的世界はどれも有機体的な力の発動舞台であり、一つの力は段階を追って発展する。その様態は、可能態Fähigkeit、能力態Fertigkeit、現実態Aktusの三つに分けられる。理性もまた、可能態として生得的に備わっており、学ぶことによって、理性を用いることが出来るようになる。この状態が能力態である。そして、実際に、理性を使用している状態が、現実態と呼ばれるものである。麻生健：『ドイツ言語哲学の諸相』（東京大学出版）1989年、52頁参照。
- (25) Die Brüder Grimm: *Vorrede*, In: *Deutsche Sagen*, Frankfurt am Main, 1994, S. 11.
- (26) グリム兄弟によって蒐集されたメルヒェン集は、日本では『グリム童話』と呼ばれ、親しまれている。この呼称にしたがい、本論考では、Märchenを童話と訳すこととする。
- (27) Die Brüder Grimm: a.a.O., S. 13.
- (28) Die Brüder Grimm: a.a.O., S. 14.
- (29) Grimm, Jacob: *Gedanken, wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten*, In: J. Grimm, *Kleinere Schriften*, Bd. 1, Hildesheim 1965, S. 399f.
- (30) Grimm, Jacob: *Auszug aus der Rede über das Heimweh*, In: J. Grimm, *Kleinere Schriften*, Bd. 5, Hildesheim 1965, S. 480.
- (31) Die Brüder Grimm: a.a.O., S. 13.
- (32) Grimm, Jacob: *Gedanken, wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten*, a.a.O., S. 400f.
- (33) Die Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*, Urfassung 1812-1814, Frankfurt am Main 1997, S. 59.
- (34) Die Brüder Grimm: a.a.O., S. 61.
- (35) Die Brüder Grimm: a.a.O., S. 62.

(つるた りょうこ／ドイツ文学)